

東北大学機械系

同窓会ニュース

第21号



機械系の新たな旅立ち	2
学部教育につきましてのご報告	3
産学連携推進室だより	4
テコンフェスティバルについて	5
地下鉄東西線が開業して	5
オープンキャンパスについて	6
学部3年生の学外見学報告	7
海外派遣報告―工学研究科若手海外派遣制度(第一期)	8
東北大学 Windows 鳥人間コンテスト優勝	9
横堀壽光教授最終講義	10
同窓会報告	11
総会・講演会のご案内	11
学生支援に関するご報告/事務局便り/編集後記	11

東北大学機械系同窓会

〒980-8579
仙台市青葉区荒巻字青葉 6-6-01
東北大学工学部機械知能・航空工学科内
電話：(022) 795-6926
FAX：(022) 795-6926
E-Mail：dousou@mech.tohoku.ac.jp
ホームページ：
<http://www.mech.tohoku.ac.jp/dousou/>
郵便振替口座 番号 02270-8-11176
名称 東北大学機械系同窓会
印刷 笹氣出版印刷株式会社

会費納入のお願い

同窓会は、会員皆様が入納される会費により運営されています。同封の振込用紙をご利用ください。

◎年会費 2,000円

機械系の新たな旅立ち

機械系主任専攻長
三浦 英生

平成24年度より二期四年間、機械系主任専攻長（就任当時は機械系長）を務めさせて頂き、本年三月を持って任期満了退任となりました。この四年間、同窓会の皆様からも暖かいご指導、ご支援を頂戴しましたこと、改めて御礼申し上げます。後任は航空宇宙工学専攻の澤田恵介教授となります。今後とも同窓会の暖かいご支援をお願い致します。

既に同窓会誌等でお知らせしましたように、機械系四専攻の名称は本年四月より、それぞれ機械機能創成専攻、ファインメカニクス専攻、航空宇宙工学専攻、ロボティクス専攻となり、一部講座（研究室）の専攻間異動もお認め頂きました。機械知能・航空工学科も機械・医工学科コースを新設し、国際機械工学コース（IMAC-U）含め8コース体制になります。新しい組織のもとで学部から大学院までシンプル&スリムで分かりやすい教育研究体制が構築できるものと期待しております。さらに、国籍条項を撤廃した完全英語教育を実現するIMAC-Uの拡充、海外大学との学生交流を活性化させるクワーター制カリキュラムの実現など、二十一世紀型の世界に拓かれた研究第一主義に基づく大学としての制度、基盤の構築に少しはお役に立てたのではないかと考えております。今後海外の大学と教育研究を共有する国際連携大学院制度の確立にも挑戦し、国際ブランド力向上にも積極的に務めていきたいと考えて

おります。

グローバル化対応の視点では、IMAC-Uの入学者は15名と従来の2倍になり、受験倍率は10倍に達しております。正規留学生数は毎年100名を越えており、短期留学生数も急増しています。日本人学生の海外派遣も留学、共同研究、国際学会など200名に達する勢いで、大学院生の約3割が在学中に海外経験を持って修了するという状況です。この一年間の学生達の国際学会からの受賞は17件に達し、海外での活躍も飛躍的に増えています。

学生と教職員の交流の場も積極的に提供し、今年もバイオリボティクス専攻の村田智教授主催のクリスマスコンサートを開催するとともに、今年度は新たに機械系教職員の親睦会である機友会と院生会の共催で全機械系フットサル大会も挙行できました。多くの留学生を含め、約200名の参加者を得て休日を楽しみました。孤独に陥りがちな研究生活とは別の、集団での連携の楽しさを味わう気分転換の場、研究以外の人脈創りの場などにも、このような親睦行事を活用できればと思います。

地球環境含め社会情勢は厳しくなる一方ではありますが、社会実装の強化も含め機械科学と工学の分野で世界の教育・研究開発拠点として更なる発展を目指すとともに、現任教職員、学生と卒業・修了生、退職教職員間の相互交流を活性化させ、生涯魅力のある場として、お互いの存在に誇りを持てるように同窓会組織も変身できればと大いに期待しております。是非同窓会組織の活性化にもご意見ご要望をお寄せ頂ければと思います。

末筆ながら同窓会会員皆様の益々の活躍とご健勝を祈念し御挨拶とさせていただきます。



新人歓迎&芋煮会 for IMAC-U 2015



全機械系フットサル大会

学部教育につきまじりの報告

機械知能・航空工学科 教務委員長

航空宇宙工学専攻 教授

岡部 朋永

近年、大学に求められる要求が変化を
してきております。中でもグローバル化
および卒業学生の質の保証に関する要求
は年々高まっております。本機械知能・
航空工学科ではこれらの動向をあらかじめ予見し、これまでも様々な取り組みを
行っておりました。例えばグローバル
化に関しましては International Me-
chanical and Aerospace Engineering
Course for Undergraduate students
(IMAC-U) という外国人向けのコース
を開設し、入学から卒業までのすべての
授業を英語にて受講可能と致しました。
また、教育に関しても、アドバイザー
教員による入学時からのケア、セメス
ター制に基づく充実した講義および3年
生からの研究室配属等、これまでの大学
に無い数多くの取り組みを行い、高校の
教員からは「大学に入ってから一番伸び
る大学」との評価をいただいております。
以上の取り組みをさらに発展すべく、
28年4月より本機械知能・航空工学科で
は、学部教育向けの改革に取り組むこと
と致しました。ここではその取り組みを
紹介させていただきますと思います。

てきたということで、本機械知能・航空
工学科におけるすべての講義を日本語・
英語の同時開講にすることと致しまし
た。28年入学の学生が29年より受講を開
始し、その旨、学生便覧に記載すること
を予定しております。これにより、学部
生は国内だけでなく国外からも広く受け
入れることが可能となります。それに伴
いまして、国際グローバル入試を実施し、
29年度の秋学期より日本国籍を持つ在外
子女の受け入れも予定しております。ま
た、英語開講クラスだけでは講義数が純
増になり現存する教員だけの運用が不
可能です。そこで、講義科目の変更も行
います。ここで変更した科目を全てお伝
えることはできませんが、数年に亘り
カリキュラム変更に関するワーキンググ
ループを結成し、検討を重ねてまいりま
した。科目のフローチャートを作成し、
似た内容を教えている科目に関しては出
来うる限り統合いたしました。また、社
会からの要求の大きい基礎的な力学の習
得に出来る限り力点を置いたカリキュ
ラム変更となっております。これにより
日本語・英語の同時開講としましても教
員への過重な負担がかかることないよう
に制度設計がなされております。

のセメスターを半分に分け、同じ講義を
週2回集中して行うことにより、習熟度
を高めようというものです。また、4つ
の学期からなることで、学生の海外大学
への短期留学もスムーズになると考えら
れております。

また、28年4月入学より現在の6コー
ス制(機械システム、ナノ、バイオロボ、
航空、量子、環境) から7コース制(機
械システム、ファイン、ロボ、航空、医
工学、量子、環境)へと移行します。こ
れは28年4月からの大学院専攻の名称変
更と連動しており、6年間一貫教育を念
頭に置いた制度変更となります。

最後に工学科が主導するレベル認定制
度への対応です。先程来述べております
ように、昨今、社会より学生教育の質保
証が求められております。本工学科に
おきましては工学教育院を設置し、学生
の学習習熟度を定量評価する取り組みを
行っております。本機械知能・航空工学
科においてもこの取り組みに参加してお
ります。特に本機械知能・航空工学科で
は成績判定システムを統一し、今後導入
が予想される米国におけるGPAシス
テムに近い評価システムへと変更してお
ります。また、基礎的な力学に関する教
科は学年全体にて統一テストを実施し、
学生の学習習熟度に対する公平かつ統一
的な評価機会を設ける予定です。

ここで紹介いたしました内容はあくまで
制度上の変更です。今後も、本機械知能・
航空工学科における理念や伝統は出来る
限り守りつつ、時代に適応した制度に改
善していきたいと考えております。是非と
も、皆様におかれましてはご指導ご鞭撻を
賜りますようお願い申し上げます。

産学連携推進室だより

機械系産学連携推進室室長
バイオロボティクス専攻 教授

小菅 一弘

機械系産学連携推進室担当

林田 静子

機械系産学連携推進室は、企業と東北大学機械系との連携強化のための情報提供、技術教育の促進と就職支援を目的として、平成12年度に発足いたしました。平成13年度からは、機械系産学懇談会(会員制)を設置し、産学ネットワークの構築を目的とした技術交流会「テクノフェスティバル」を開催すると共に、複雑になった機械系組織をわかりやすくお伝えすることを目的として、研究室紹介誌「OPEN」を発行しております。

学生の就職支援では、平成26年度から大学推薦の新たな制度(機械系オープン・ジョブマッチング)を一部の企業と試行してまいりました。オープン・ジョブマッチングとは、経団連倫理憲章に定められている広義の選考活動で、大学推薦で就職を希望する学生が、予め企業と連絡を取り、学生自身の希望する職種がその企業にあるかどうか、企業が期待する人材像がどのようなものかなどの情報交換を行って、互いにマッチングが成立した企業に対して学生の大学推薦を行うものです。

昨年度までの試行で、機械系オープン・ジョブマッチングが、学生と企業の双方に有益であることを確認することができましたので、平成28年度からは、大学推薦による求人希望される企業で、本制

度の趣旨をご理解いただいたすべての企業に対して実施することにいたしました。従来からの大学推薦制度も継続運用しています。

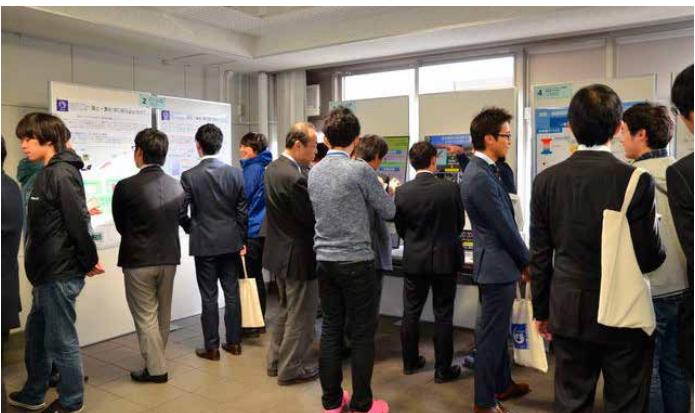
平成27年度は、オープン・ジョブマッチングを経て大学推薦した学生の合格率が97%となり、B方式と合わせて合計151名の学生が、大学推薦によって就職先を決めました。残りの学生は、自由応募で就職先を決めた学生と、博士後期課程へ進学する学生です。

平成27年度は、学生が学業に専念する十分な時間を確保できるようにとの配慮で、経団連による採用選考活動の開始時期が見直され、8月1日以降に最終選考が行われました。学生からは「就職活動が長期化し、負担が増した」、企業側からは「適正な内定者数を読み切れず、内定を多く出した結果、辞退者が相次いだ」との不満の声が上がリ、平成28年度は再度日程が見直されて、3月1日から求人広報活動、6月1日から最終選考活動が解禁されます。機械系では経団連のルールを遵守し、就職支援活動を行っています。

平成27年12月18日～20日には、学生のキャリア教育の一環として「テクノフェスティバル」を開催いたしました。12月18日に開催された研究室紹介では、36研究室の若手研究者と学生による研究紹介が行われ、59社83名の方に参加していただきました。12月19日～20日に開催された技術交流会では、2日間で87社、延べ170名の企業関係者と360名の学生が参加し、真剣且つ活発な技術交流を行うことができました。本年3月1日からは企業求人広報活動が解禁になりま

すので、今後、技術紹介セッション、オープン・ジョブマッチング等を進めていく予定です。

機械系同窓生の皆様には、企業と機械系研究室との連携ならびに卒業生の就職に関しまして、日ごろ多大なるご協力をいただいております。この場を借りて教職員学生一同感謝申し上げます。今後も、皆様方からのご意見を基に、産学連携活動のさらなる活性化を図りたいと考えておりますので、引き続きご支援のほどよろしくお願い申し上げます。機会がございましたら、是非機械系産学連携推進室(2号館3階307号室)にお立ち寄りください。



テクノフェスティバルについて

株式会社ジエイテクト
工作機械開発部標準機開発室

原 麻美

(機知修平16年卒)

普段は工作機械・マシンングセンタのメカ設計業務に従事していますが、数年前から東北大OGのリクルーターとして、何度か母校を訪問しています。今回は約2年ぶりに仙台を訪ね、2015年東北大学機械系テクノフェスティバルに参加しました。

テクノフェスティバルは、「技術情報をメインにした企業と学生との情報交換会」です。企業側としては学生に自社及び自社技術をアピールできますし、学生サイドも企業の最新情報を集めることができます。また、テクノフェスティバルの企業側参加者には私のような東北大OB/OGが少なからず参加していることもあり、卒業後のキャリアプランを具体的に考える絶好の機会になるようです。

今回、弊社からは簡単な会社案内と、最近のマシニングセンタの技術「スカイピング加工」と「リアルタイム熱変位補正機能」を学生に紹介しました。スカイピング加工というのはマシニングセンタに追加した高速回転するワーク軸と、主軸に取り付けたスカイピング工具を同期回転させることで、ギアを高速で削り出して加工する工法です。従来工法に対して特にリードタイムが優位になることから最近注目されている技術です。この加工の動画が画期的で大変面白く、多くのお客様からもご好評をいただいている

ので、是非紹介したいと思っていたのですが、予想通り、東北大の学生にも大変好評で、歯切りが完了した瞬間の学生のアツと驚いた顔を見ることができました。学生からも専門的な質問がポンポン出てくるのが面白く、そして頼もしいと感じました。

全体的に、工場見学やインターンシップなどに興味を持ち、就職先の選定に会社の雰囲気を大切に考えている学生が多いという印象をうけました(昨今のブランク企業・ハラスメントなどの問題、大手企業の失態が続くためでしょうか)。また、「リケジョ」や「ダイバーシティ」等の言葉もよく耳にするので、女性の学生が増えているのかと思っていたのですが、残念ながら機械系については私が在学していたときから状況はあまり変わらなようです。

土曜・日曜の開催ということ、ひよつとして参加する学生が少ないのではと心配していましたが、幸いにも多くの学生に訪問していただき、会場のあちこちで企業と学生とのディスカッションが活発に行われ、大変盛況な様子でした。弊社のブースにも17名の学生に訪問していただき、短い時間でしたが交流を深めることができました。

最後になりますが、今回のテクノフェスティバルの運営にあたり、産学連携推進室室長小菅教授はじめスタッフの皆様に変更がたい機会を設けていただき、ありがとうございます。来年以降の開催も、是非よろしく願います。

地下鉄東西線が開業して

情報科学研究科 教授
山本 悟

2015年12月6日、仙台市地下鉄東西線が開業しました。さつき私も利用しています。南北線は1987年7月開業ですので、かれこれ30年近く経てからの大きな進展です。まさか地下鉄の駅が青葉山にと驚かれたOB方々もおられるかもしれません。

約35年前当時、自動車通学はまだめづらしく、一方でバスは本数が少なく利便性があまり良くないため、機械工学科の同級生はほとんどがバイク通学でした。私も学部時代はバス通学でしたが、大学院時代は利便性からスクーターを利用していました。ただ就職してからは、仙台駅東口近くのアパート、結婚してからは三神峯の大学宿舍、そして角五郎の公務員宿舍と転居したものの、いずれもバス通勤でした。そして最近、地下鉄南北線を利用するようになりました。現在は泉区に住んでおり、地下鉄南北線を泉中央駅から仙台駅まで利用して、その後バスで青葉山まで通勤する生活をここ3年ほど続けていました。実は泉区に住もうと思っただきつかけが東西線の開業です(青葉区はすでに住宅地価が高すぎるのが本来の理由ですが)。

青葉山は、冬に大雪が降ると交通が遮断されてしまいます。三神峯から通勤していた頃、バスが大雪のため動物公園辺りの渋滞で動かなくなりまして。その日はあいにく卒論の発表日で、重ねて朝一番に研究室学生の発表ということもあ

り、バスを降りて30センチほど積もった雪の中を、動物公園から青葉山まで雪を被り汗だくになりながら急いだ苦い記憶があります。その後も何度か大雪で不便な思いをしたことがあります。地下鉄ならばこんな経験はもうないだろうと安堵しています。

泉中央駅から青葉山駅までは乗り換え時間も含めてほしい25〜30分で、料金は360円です（仙台駅から青葉山駅まで9分、250円）。ただし、青葉山駅が青葉山キャンパス西端にありホームも地下6階とかなり深くに位置しているため、本来ですと地下鉄ホームから機械系まで徒歩15分程度かかり時短のメリットはないのですが、幸い青葉山キャンパス内のシャトルバスも同時運行されましたので、徒歩よりはかなり速く移動できます。



青葉山駅に到着する地下鉄東西線

自動車の利用者増で年々バスの利用者が減り続け、その結果バスの便数も長年徐々に減り続けていましたので、公共交通機関を利用しての一人としては地下鉄東西線の開業は心から歓迎できます。あいにく、新規開業のためか青葉山方面の利用者はまだ少ない状況（逆方面は満員）ですが、約7分間隔の運転でかつ青葉山駅終電はほぼ24時です。学生の利用者はこれから増えてくると予想します（学生用東西線フリーパスは1ヶ月7,000円）。

オープンキャンパスについて

航空宇宙工学専攻 准教授

大西 直文

平成二十七年七月二十九日から二日間の日程でオープンキャンパスが開催されました。機械系には両日で延べ三八二二名の来場者が訪れ、工学部全体の来場者数八千名に対しほぼ半数となるほどの大盛況となりました。両日とも天候に恵まれ、用意していた配布用ドリンクが足りなくなるほど気温が高い中での開催でしたが、それに負けないぐらい熱気のある二日間となりました。

本年度のオープンキャンパスでは、多数の学生ボランティアに協力いただき、学生主体で当日の運営を行う昨年度までのスタイルを踏襲しました。近年、オープンキャンパスへの来場者の大多数は高校一年生・二年生であるため、学生に積極的に運営に関わってもらうことで、より高校生に大学を身近に感じてもらうこ

とを目指しました。また、明確な見学先を持たない来場者に対しておすすめの見学コースを提案する「コンシェルジュ」や、指定された研究室を訪問する「スタンプリ」などの企画によって、来場者に様々な研究を知っていただく工夫をしました。その甲斐もあってか、当日実施したアンケートでは、想像していなかったような研究に驚いたという声も聞かれました。

また、毎年実施している「オープン講義」では、機械系からは二日間で四名の先生方に講義を行っていただきました。当日は、高校生はもちろん、そのご父兄を含めた多くの来場者で立ち見が出るなど、例年通り大盛況となりました。遠方からオープン講義を目当てに来場される方も多数見受けられ、会場は文字通り熱気に包まれましたが、一方で入場者多数のため入場をお断りせざるを得ない事態も発生し、来年度に課題を残す形となりました。

恒例となった「機械大博覧会」では、研究に関連するいくつかの企業に協力いただき、それぞれ趣向を凝らした展示を実施していただきました。機械系で行われている研究が、どのような形で社会に活かされているかを知ることができ、来場者の方々に大学と社会との繋がりが、そして大学生活だけでなく、その後の技術者としての活躍もイメージしていただけたと思います。

さらに、来年度の機械知能・航空工学科のコース再編を控え、「REBORN」というキーワードとともに、機械系が新たな一歩を踏み出すことを今回のオープンキャンパスを使って来場者にお知らせ

しました。鮮やかな色彩の大きな看板と、インフォメーションコーナーに設置したコース再編の案内によって、機械系が現在もアクティブに活動しながら、さらなる飛躍に挑戦する姿勢を印象付けることができたと考えております。

最後に、関係各位、ご参加いただいた同窓会の皆様方に厚く御礼申し上げます。

学部3年生の学外見学報告

大学院情報科学研究所 准教授
昆陽 雅司

機械知能・航空工学科では、学科創設以来、学部3年生の正規課外授業の一環として、企業や研究機関の見学学習を実施しております。その目的は、企業における生産活動や研究開発の現場を学生に見学させることにより、機械工学に関する大学での講義や実習が実社会においてどのように活かされているかを自ら発見させることです。また、学生にとっては将来の進路を考慮する上で貴重な機会となると期待しております。

平成27年度は、9月1日～9月4日に、ナノメカニクスコース46名が、9月7日～9月10日に、機械システムデザインコース60名、および、バイオロボットシステムコース44名が、9月8日～9月11日に、航空宇宙コース46名が、4日間にわたり、仙台近郊から首都圏にかけて6～7社を見学しました。具体的には、本田技研、小松製作所、USCJ、日立製作所、原子力機構、東北電力、新日鐵住金、東芝

日本電気、日立ハイテクノロジーズ、富士通、オリンパス、川田工業、富士フィルム、いすゞ自動車、三井化学、日立建機、トヨタ自動車東日本、日本航空、IH-I、JFEスチール、電子航法研究所、JAXAの各社様にご協力をいただきました。各コースとも、2名の教員が学生を引率いたしました。本稿では、筆者が代表して、担当したバイオロボットシステムコースを一例に、その概要をご紹介します。

初日の9月7日は、早朝7時前に仙台駅東口に集合し団体バスで出発しました。早朝にもかかわらず、遅刻者もなく予定通り出発することができました。午前中の見学先は、福島県の会津オリンパスの工場です。驚くほど精密な医療用機器の製造工程を間近に見ることができました。学生は、社内の教育制度などで、ひたむきにスキル向上に取り組んでいる工員の姿が印象に残ったようです。午後は、栃木県の川田工業・ロボティクス事業部を訪問しました。ロボットの実機デモに加え、鋼構造物用の大型風洞実験設備も見学させていただきました。

2日目午前は、小田原の富士フィルム・メディカルシステム開発センターに訪問し、機器のCADによる設計の様子から、耐久試験に至るまで機械工学がどのように製品開発に活かされているかを実感することができました。午後は、いすゞ自動車・藤沢工場にて、トラックの製造ラインを見学しました。自動化された製造過程の中でも、カスタム仕様の多いトラックならではの効率化の工夫があり、日本の工場の「改善」文化の一端を肌で感じることができました。

3日目は、午前中に三井化学・市原事業所を見学し、機械系ではおそらく初めての化学プラントの見学を行いました。近年、機械部品の中でも樹脂部品や複合材料などの新材料が多く使われており、学生には刺激になったようです。午後は、新日鐵住金君津製鉄所を訪問しました。最大級の工場規模と熱気に圧倒され、学生も興奮したようです。また、同社には、夜に機械系OBとの懇親会と宿泊施設の提供までしていただき、和やかに先輩方と語り合うことができました。

最終日は、午前中に日立建機・土浦工場を訪問し、大小様々な建機の製造工程を見学することができました。また、同社には昼食を提供していただき、東北大OBの方々と会食をしながら、業務内容のみならず、学生の頃のお話やアドバ



新日鐵住金君津製鉄所にて

イスを伺うことができたようです。

今回の学外見学では過密な旅程の中で、バスの中でお弁当を食べながらも、訪問企業の事前調査を発表し合うなど、学生の熱心な取り組みに関心いたしました。今後の授業や研究への取り組みにも活かされるものと期待しております。

最後になりましたが、ご対応下さいました各企業の皆様に厚く感謝申し上げます。今後もこのような機会を学生に提供し、見学先の開拓も積極的に進めて参りたいと思います。同窓会会員の皆様にもぜひご協力を賜りたく、ご検討いただけます場合は、ぜひご一報いただけますと幸いです。

海外派遣報告—

工学研究科若手海外派遣制度（第一期）

航空宇宙工学専攻 准教授

永井 大樹

2013年度より新設された「工学研究科若手海外派遣制度」のご支援のもと、2014年10月から2015年9月までの一年間、米国カリフォルニア州パサデナ市にあるカリフォルニア工科大学ジェット推進研究所（Jet Propulsion Laboratory、JPL）に滞在する機会を頂いた。

この制度は、工学研究科に在籍する若手教員を対象として、各研究分野において、将来戦略上重要な位置を占める海外の大学、学術研究機関等に派遣することにより、国際研究ネットワークの核となる優れた研究者を育成するとともに、本

研究科の学術の振興を図ることを目的とした「工学研究科独自のプログラム」であり、私その第一期生となる。

さて私の滞在したパサデナ市は、ロサンゼルス北東に位置し、カリフォルニア工科大学を中心とした学園都市である。カリフォルニア工科大学は東のマサチューセッツ工科大学と並び称される工学および科学研究の有名大学であるが、それ以上に、附置研究所であるJPLはパイオニア、ボイジャーなどの太陽系外の惑星探査で世界的に有名であり、近年では、2012年に火星に着陸した火星探査ローバー Curiosity（日本語では「好奇心」、名前の付け方も秀逸である）が火星に生命が存在する／しないなどのわくわくする話題を振りまいている。

カリフォルニア工科大学は、パサデナ市の中心に位置するが、私の滞在したJPLは、もともとロケット推進に関わる研究所であり、市内から10km程離れた山間に位置する。この研究所の初代ディレクターは、流体力学で有名なカルマン渦列を命名したフォン・カルマンであり、流体を研究している身からすると感慨深いものがある。JPLは大学の研究所であるため、研究者の方は皆、カリフォルニア工科大の職員であるが、その活動のほぼすべてをNASAからの基金で賄っているため、一般的に、成果は、NASA・JPLと表されることが多い。

私がJPLを選んだ目的は、大きく二つある。一つは、私自身が現在、国内において飛行機を用いた火星探査の研究を精力的に行っており、今回の海外派遣では、その火星探査において、世界の研究開発を牽引しているJPLに滞在し、宇



宙ミッションにおけるシステムの考え方やミッション機器の設計思想について学んで来るということ、特に、火星ローバー Curiosity に関して、その上流の設計思想に加え、ミッション成功の鍵を握る特徴的な熱流体を利用した熱制御システムについて、多くの考え方を学ぶということでした。もう一つは、JPLと共同で新たな二相流体を利用した熱制御システムを共に立ち上げるということです。ここではある制約から詳細は書きませんが、お互い win-win な関係を築ける土台があったからこそ、米国の惑星探査の最先端の研究所に快く受け入れてもらうことが出来たのだといえます。結果とし

東北大学 Windnauts 鳥人間コンテスト優勝

東北大学 Windnauts 2015代表

機械知能航空工学科3年

松崎 秦

て、時間的制約（休みが多い！）、考え方の違いから思ったほどの進捗は得られませんでした。私が日本に帰国後も相互に技術交換を行いながら研究開発を進め、2016年の1月から2ヶ月間、学生を派遣することが決まり、いい関係を築くことが出来ました。これが最大の成果だと思っています。これを機に、今後も交流を継続的に言い、最終的には共同で宇宙探査ミッションを提案するつもりです。

このカリフォルニアでの生活は、研究はもとより、その温暖な気候、透き通るような青空による開放感の中、いろいろなところを訪れることが出来たこと、またいろいろな方（研究所の方々、米国で活躍している日本の方々）との交流、つながりが出来たことも大きな成果ではないかと思えます。このような充実した日々が過ぎたのも長期に亘る海外派遣を快諾して下さった浅井教授によるところが大きく、心より感謝致します。また私の不在の間、たくさん学生の面倒を見てくれた沼田助教や後輩たちの面倒を見てくれた博士課程の大丸君、煩雑な旅費計算などの事務的サポートをして頂いた機械系事務スタッフの皆様、授業を代行して頂いた大西准教授、加えて、多くの宇宙探査業務の中、快く受け入れて下さったJPLのスーパーバイザーであるEricさんとそのグループの方々による場を借りて御礼申し上げます。最後に、私を支えてくれた妻と子供たちに感謝したいと思います。

同窓生の皆様に学友会人力飛行部、Windnautsの今年度の活動を報告いたします。私たちは、年に一度琵琶湖で開催される「読売テレビ鳥人間コンテスト」の出場に向けて人力飛行機を製作しています。出場する部門は人力のプロペラ機で飛行距離を競う「デイスタンス部門」です。今年で創部から21年が経ち、過去に16回の出場・4度の優勝という記録を残してきました。しかし、前回優勝した2012年大会から2年間、優勝から遠ざかっており、今年の2015年大会はチームの進退に関わる大きなターニングポイントとなると考えていました。そのような意気込みで臨んだ7月の大会、私たちは遂に優勝の2文字に辿り着くことができました。我が子さながらの機体が琵琶湖上空を優雅に翔け、35、367mの大フライトを遂げました。この記録は2008年にWindnautsのOBの方々が残した36,000mに次ぐ歴代2位の記録です。応援してくれた多くの方々の御期待にも応えることができ、嬉しく思うと共に安堵の気持ちです。さて、ここからは優勝に向けた具体的な取り組みについて紹介いたします。私たちの代では、代々受け継いできた技術に基づいた機体製作は勿論のこととして、パイロットの育成に重点を置いて活動しました。琵琶湖の風の様子は日によって、また場所によって複雑に異なり

ます。更に人力飛行機は30kg程度と軽いため、外乱に弱い飛行機です。そこで、安定した航行を行うには単純な出力の大きさだけでなく、変化する風への対応が不可欠であり、習熟した操縦技術を要します。この訓練として、私たちは機体調整を兼ねた飛行試験を毎年6〜7月に行っております。この飛行試験を数多く効率的にこなすことが、大会成績に結びつくと考えたため、より早く機体が完成



横堀壽光 教授 最終講義

するよう全体のスケジュール調整を行いました。結果として、十分なトレーニングを済ませた上で大会に臨み、功を奏したということです。

この記録の立役者となったパイロットの松島（工学部3年）は、大会後に「琵琶湖上は全てが楽しかった」と語ってくれました。また、私たちの機体はほぼ一から製作を行うのですが、完成した機体は設計・製作に関わったメンバーの粋を集めた素晴らしいものでした。本番でもそのポテンシャルを十分に発揮してくれたと思います。最高の仲間たちに恵まれ、製作に取り組んだ日々を忘れることはないでしょう。

最後に、1年のプロジェクトを通して学んだことは、私たちのチームがいかに周囲の助力の元に成り立っているのかということだと思います。本年度も多方面から多大な協力をいただいたこと、誠に感謝しております。来年度へ向けてですが、私たちの最終到達点はここではありません。さらなる記録に向けた課題は山積しており、目指すは前人未達の40kmです。3年生は今年度で引退となりますが、後には意志を引き継いでくれる頼もしい後輩たちがいます。皆様、今後共Wind-nautsの活躍に御期待、御声援の程どうか宜しくお願いいたします。

平成28年3月末をもちまして、機械系教授の横堀壽光先生がご退職されます。

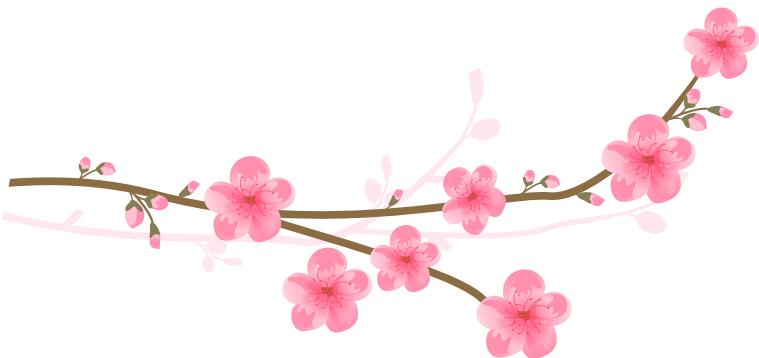
横堀先生は昭和53年3月に東北大学大学院工学研究科機械工学第2専攻博士課程を修了され工学博士の学位を授与されました。

同年4月本学工学部機械工学第2学科助手、54年6月に助教を経て、平成13年1月に本学大学院工学研究科附属破壊制御システム研究施設教授に昇任されました。同16年4月本学大学院工学研究科ナノメカニクス専攻に配置換えされています。

先生のこれまでのご業績を称え、また長年の御苦勞に感謝の意を表すべく、最終講義が開催されます。

平成28年2月26日・機械系第1講義室
「材料強度学の基礎理論とその実用化へ向けての研究」

先生の研究生生活の集大成となる貴重な御講義ですので、是非ご参加下さい。



同期会報告

機械三十一年卒同期会

機械31年卒同期会は近年11月の第2木曜日に、日立製作所OBの渋谷俊徳君の紹介で、「日立かまくらクラブ」で開催することが通例になってきていますが、今回は常連の都合で11月11日（水）に開催しました。

同期生の一人が開催日時を勘違いして前日の10日（火）に来てしまい、当日は欠席となり、出席者がだんだん減少して今年はずっと8人になりました。

同期生は卒業時に54人だったかと思いますが、すでに21人が他界され、現在では33人に開催通知しています。今回そのうち2人が音信不通で、他の31人から近況



後列左より：小田桐、小野寺、西尾、石川
前列左より：渋谷、佐藤、羽根田、大野

報告を頂いていますが、殆どの人が健康上の不具合を抱えているようです。

我々は82歳前後であります。統計数字を見ると平均余命は7・14年のようですので、今後は益々健康に留意して、より長く元気に毎日を楽しまたいものです。

会合の中で小野寺朗君から提案があり、来年は卒業60年目になるので次期同期会を仙台で開催してはどうかという提案があり、次回幹事になった佐藤忠教君と渋谷俊徳君が実行するかを検討し、仙台に詳しい羽根田健君のサポートを得て決定していくことになりました。

石川 巴義
(機械工学科31年卒)

機械三十三年卒同期会

2015年度燦燦会

2015年度燦燦会(同期会)が9月15日16日の二日間、松島のホテル大観荘に一泊して開催された。私達の同期会燦燦会は毎年秋に催されてきたが、昨年東京で開かれた時の幹事長荒野詰也氏の申し送り「来年度中には全員が八十歳となり、傘寿を迎えることになる。それを記念して仙台でやってほしい!」との締め付けの挨拶で、世話役は自動的に仙台在住の今野宏卓氏(幹事長)と松山圭宏(幹事)が務めることになった。

仙台での開催は過去に5回あり、今回は6回目である。最近では2008年に卒業50周年を記念して秋保の佐勘で一泊して楽しんだ。この時には、大学の事務局のお世話になり、東北大学の現状を

スライドで説明していただいたり、片平の構内を中心に案内していただいた。

今回が仙台開催の最後になるだろうと予告して計画を進めて来たが、参加人員は会員24名、ご夫人11名計35名で、ご存命でおられる方の半数が参加されたことになる。やはり一泊となると遠出がむずかしい方が多少おられた様である。

当日は、三々五々、ホテルに到着され、久しぶりに観る各人の部屋の窓から眺めた松島湾の景色を堪能されて、夕方5時30分より宴会場で記念の集合写真を例年通り戸田忠秀氏に撮っていただき、今野幹事長の司会進行で宴会に入った。松山が歓迎の言葉を述べたが、仙台での開催が最後となる、2015年の燦燦会がどの様な年に催されたかを皆さんの心に刻んでもらうために、敢えて本年に話題となった次の四つの政治課題について申し上げた。(一)安全保障関連法案。(二)太平洋戦争終戦70周年(昭和20年8月15日の玉音放送)。(三)安倍首相の歴史認識(安倍首相対習近平・朴槿恵)。(四)人口減少問題と難民・外国人労働者の受け入れ問題。

宴会は、高橋康英氏の「ハーモニカ独奏や大木安弘氏の「ぐずらんこ物語」などの余興で盛り上り、2時間30分の時間もあつという間に過ぎてしまった。

最後に今野幹事長より来年の幹事長を馬場武明氏にお願いし、学生歌「青葉萌ゆる」を全員で斉唱して終了した。

別室での二次会には35名全員が参加して、先に提起した四つの政治課題も話題の一つとなり、各テーブルとも議論百出し、夜が更けるのも忘れて楽しく懇談することができた。

機械三十五年卒同期会

平成27年10月21日、秋晴れの穏やかな日差しの中、正午近くの片平北門会館レストラン「秋」のウッドデッキに三々五々同級生が集まりました。昭和35年に機械工学科を卒業して、我が国の発展に貢献した自負を持つ面々です。

卒業時は55名でしたが、55年後の今は45名の消息が明らかになっております。今回は32名の参加で五年毎の節目の同級会になるので母校がある仙台、松島を開催地として、次の三項目を狙いに催しました。

一、東北大学の現状と将来展望を知る
 二、東日本大震災の被災地の現状を見る
 三、女川原発再稼働への活動状況を知る
 レストラン秋で昼食を摂った後に、同じ階の会議室「エスパス」で青木孝文副学長による講演「東北大学の現状」を拝聴しました。大学は社会の要望に応える自主的、創造的な研究・教育を力強く指向しており、同時に優秀な人材を確保するための環境整備に非常に努力されていることを改めて知りました。その後、片平キャンパス内の大学本部、旧機械科棟、魯迅が学んだ階段教室等を見学後にバスで青葉山キャンパスに移動しました。当キャンパスは自然豊かな敷地の中に新装なった建物群が溶け込んで、アカデミックな雰囲気を感じていました。

災害科学国際研究所では源栄（もとさか）正人教授による「東日本大震災の実態と教訓」と題する講演を拝聴しました。その後、工学部機械系の建物に入り、厨川（くりやがわ）常元教授からナノ精度

加工学研究室で現在手がけている研究のトピックスの説明があり、超精密加工の実験室を見学しました。

色づいてきた紅葉を横目に、五年前に卒業五十周年の記念で寄贈したソーラーパネル付きの自立型外灯を背景に集合記念撮影をしました。

秋の早い夕暮れに追われるように、広大な青葉山キャンパスを後にバスは松島へ向かいました。ホテル松島大観荘に着後は一風呂浴びてから大宴会場に集まり集合写真撮影を終えてから、ゆつくり椅子席に座って大宴会を始めました。始に過去五年間に鬼籍に入られた五名に黙禱を捧げた後、金森幹事長の挨拶と最遠者の石川浩さんの乾杯の音頭で宴が始まり、各自の一分間スピーチでは、人生観やボランティア活動、様々な趣味の披露等皆さんの豊かな老後を垣間見ることが出来ました。

最後に全員で肩を組んで学生歌「青葉萌ゆるこのみちのく」を歌って終わり、次のカラオケ会場に移動しました。

翌二十日は早く起きて朝食を済ませ、八時にホテルを出発して松島五大堂、瑞巖寺を観光後に、東日本大震災の被災地石巻の門脇地区の更地をバスの中から見て犠牲者に冥福を祈りました。

更にバスで東に進み女川町の高台から港や津波ですっかり流された更地を眺めて改めて津波の恐ろしさを実感しました。その後、金森さんが昔勤めていた東北電力女川原子力発電所に入り、厳しいセキユリティ・チェックの後に、原子炉、タービン建屋内まで見学出来ました。女川原発が大震災にもかかわらず福島原発のような水素爆発を起こさずに、無事に



ホテル松島大観荘での集合写真

9月に入って雨の日が多く心配されたが、2日間好天に恵まれ、15日は仙台・松島を中心にそれぞれ散策され、16日には、大震災の傷跡を、又東北地方への旅行へと、互いに別れを惜んだ。来年も元気で再会を誓って！

了

松山 圭宏

(機械工学科33年卒)

冷温停止が出来たことは評価されて然るべきだと思います。

今回の同級会は仙台在住の金森昭士さんが全体のプロデュースと演出を引き受け、東北大学の元監事であり今の本会の会長である杉山一彦さんが大学関係者との調整をして頂き、非常に内容の濃い、充実したものになり、お二人の尽力と人脈が実を結んだ賜と、参加者全員が感謝・感激する同級会になりました。

すっかり暗くなった午後六時に名残惜しみながら仙台駅で別れました。

村上 信一
(機械工学科35年卒)



機械二十九年卒同期会

機械工学科を昭和39年に卒業して以来51年半になる同期会を平成27年10月末日に東京で行った。遠くは高知や広島から29名の参加者があった。今回は特に関東周辺の方々には日帰りの気楽さで参加数が増えるよう昼食パーティー形式とし、田辺幹事がOBの東京ガス(株)の青山クラブにて行なった。2年前に50周年記念大会を仙台秋保で37名の参加で行ったばかりであるにも拘らず今回は29名の参加。恐らく70歳代の同期会の中では最も多い参加数ではないかと思われる。

酒井幹事の開会の辞の後、亡くなった同期生に黙とうを捧げた。卒業時の55名に対し物故者は4名だけというのは健康な仲間だと、これも自画自賛であった。今野君が幹事を代表して挨拶と過去の会の経緯、伝達事項を報告し、更に会場に最も近い住人である原山君の歓迎の挨拶と乾杯の後、支部報告などがあった。何しろ支部まである同期会は珍しく、関東、関西、東海の三つの支部があり、全体会の他に時折支部の集まりもあつて強い結束を誇る同期である。

歓談に入つて和気藹々になったものの、それほど料理もお酒類も進まないのも年齢的に致し方ないであろう。歓談と並行して前回の仙台の50周年や支部の集まりの写真が投影披露されて(小嶋君が資料保存)、それぞれ和やかに会話は弾んだ。1泊の時は全員が近況報告をしていたが、今回は限られた時間の中で参加者が多いため、一言おしゃべりをしたい者だけを募つたら関連な6名程度がマイ

クを握つた。2時間ほど経過してから「青葉城恋歌」が草野・奥田両君のリードで始まり、恒例によつて「青葉もゆる」を富松君の指揮で肩を組んで合唱し、全体写真を撮り、新岡幹事の閉会の辞で約2時間半の会を締めくくつた。

「青葉城恋歌」は仙台で学生時代を過ごした人にとっては(敢えてどんなとは言わないが)偲ばれる想い出があると思えるように、皆さんが日本のどこにいても歌われているようであるし、「青葉もゆる」はこの同期会でも定番であろう。最後に筆者が、転んで怪我をしないよう、朝食を食べたかどうかを忘れたりしないよう、そして死ぬなよ、と呼びかけたが、年月と共に身につまされることになりつつあり、いささか真に迫り過ぎたかと思つたが、集まつた諸氏は極めて元気だったので杞憂であつたかもしれない。

新岡 高
(機械工学科39年卒)



機械第Ⅱ四十二年卒同期会

平成26年10月9日に名古屋駅に集合し、その日は豊田佐吉の繊維機械と自動車の技術変遷を紹介した産業技術記念館と金の鯨はこの名古屋城を見て回り岐阜に移動しました。そして鶴飼で有名な長良川の「鶴匠の宿 すぎやま」ホテルに着きました。総勢26名、北は山形、南は広島から集まりました。宴会は6時から始まり宴途中で、6名の鶴匠が乗る鶴飼舟6漕が上流から追ってきたアユを囲って鶴を使って餌をする風雅な鶴飼のクライマックス（総がらみ）をホテル支配人の説明を受けながら宴席から観覧しました。

これは同期会中部支部が幹事となり全国から同期の桜を集め催した卒業して47年目の同期会でした。立川氏を幹事長にして青木氏、三科氏そして片柳が分担しお膳立てしたものでした。我々の同期会は全国に支部があり、関東支部、関西支部等々があり各支部は地区ごとに頻繁な交流、飲み会を実施していますが、3年に一度は全国規模で開催しています。3年に一度の幹事は持ち回りで伊勢、六甲山、仙台、近江、箱根、花巻だったりして開催しています。勿論、名所旧跡が目当ての集まりではなく、宿でのわいわいがやがやの酒話で旧交を温めるのが目的です。殆どは高度成長期に先頭に立って活躍しそして今は第一線を退き、足取りは爺っぽく、頭は白か禿て、お腹は出た、でも未だ精神面持の残る好々爺達でした。菜園に、旅行に、ゴルフにと夫々余世を楽しんでいる輩達ですが、今回も学



生時代と変わらぬ雰囲気の中で気安く過ごせた一泊二日となりました。

翌日は信長の金華山、岐阜城に登り、「板垣死すとも自由は死せず」の銅像のある岐阜公園、歴史博物館を回りました。次回の全国規模の同期会は卒業後半世紀、50年目の節目となることより再び共に学んだ仙台でと言うことで再会を約して岐阜駅で散会しました。すでに70歳を過ぎた仲間ですが物故者は未だ2名（内1名は東北震災の犠牲者）と少なく、又、病気を患っている者も少々はおりますが次回も健康体で会えることを期してまた全国に散らばりました。

47年目幹事一同

機械工学第Ⅱ学科50年卒同期会報告

機械工学第Ⅱ学科50年卒同期生は、30周年同期会を仙台（東北大見学から秋保温泉泊）で開催した後は、有志による忘年会または新年会を、東京で年1回開催してきました。今年（2015年）の新年会で、卒業後40周年にあたる今年の秋に仙台で40周年同期会を開催することが決まり、狼（代表）、桑野（仙台）、安藤（総務）、石塚（会計）の幹事4名で相談し、開催日は11月6日（金）、東北大見学から作並温泉泊、翌日はオプショナルツアーという企画で、同期会案内状を送りました。

同期生の大半が63〜65歳になり、退職、転職などで連絡がとれない人が多くなってきたため、機械系同窓会の支援を受けて入手した同期生名簿をもとに、名簿を更新しました。最新名簿では、卒業生は58名、物故者4名を除く54名のうち、郵便物送付可能者49名、電子メール連絡可能者38名となり、連絡網が充実しました。まだ、連絡がとれない同期生が5名いますので、引き続き調べていきます。

40周年同期会の参加者は15名です。11月6日（金）午後、東北大工学部機械系のロータリーに集合し、同期の桑野教授の案内で、機械系のシンボルであるタービンロータを見てから、紅葉真っ盛りのなか、青葉記念会館、中央棟、マテリアル・開発系研究棟などを散策し、東日本大震災からの見事な復興状況を体感することができました。機械系エリアに移動し、昔はなかった、コンピニ、カフェ、

自動車の過去・未来館のT型フォードを見学した後、機械知能系共同研究棟で高・清水研究室、機械系2号館で桑野・原研究室を見学しました。機械系同窓会幹事を務められている清水准教授からは、最先端の精密計測、精密加工技術を懇切にご説明いただきました。金曜の午後というのに、多くの学生が、研究室で真剣にパソコンに向かい、実験に取り組んでいる姿には驚き、感心しました。桑野教授の研究室の見学は、30周年同期会以来2回目になりますが、研究設備の充実、研究内容の高度化は顕著なものがあがり、マイクロセンサの開発など実用化が期待できるものが多く、今後の発展が楽しみです。機械系の最先端研究の盛況の一端を知ることができ、研究室をご紹介いただいたお二人と、ご支援いただいた機械系同窓会には深く感謝いたします。



(後列) 末 相原 神林 壘目 小川原 石塚 新田 石田 大友 安藤
(前列) 栗原 斎藤 狼 桑野 金子

大学見学後、ジャンボタクシーに分乗して、作並温泉岩松旅館に向かいました。作並温泉も紅葉真っ盛りで、名物の露天風呂にゆつくりとはいり、疲れをいやした後、懇親会を開きました。はじめに、4名の物故者に1分間の黙禱を捧げた後、狼代表幹事のあいさつで乾杯をしました。近況報告は、毎年会っている人は手短かに、40年ぶりの人は時間無制限で行い、中締め後は、一部屋に集まり、旧交をあたためました。翌11月7日は、ニツカウキスキー宮城映蒸留所見学、鳳鳴四十八滝観光ツアー組と、ゴルフ組にわれ、それぞれ楽しい一日を過ごしました。来年(2016年)以降の同期会は、東京で年1回、節目の45周年(2020年)は一泊で開催する予定です。同期生各位は、ぜひご参集ください。

安藤 克己
(機械工学第Ⅱ学科50年卒)

精密三十二年卒同期会 (第十七回目の同級会)

平成27年11月10日(火)の午後、精密工学科昭和32(1957)年卒業生は、文京区小石川後楽園内の「涵徳亭」に、13名が集まり同期会を開催した。昨年より1名多い。当初出席予定であった高柳正彦氏は急用のため、欠席した。昨年事情があつて欠席した市川嘉宏氏、上西武仁氏は元気な顔をみせてくれた。

町 眞次氏(三島市)は、沼津市の小泉 晋氏に同道しはやばやと会場に着いた。この日の東京の最高気温は、18.2度、おだやかだった前日の夜からの雨が

午前中まで残り、早々に会場内の部屋(不老の間)に入る。山崎 勉氏に集合写真を撮ってもらう。会場が一部屋になったため、被写体とカメラの位置を合わせるのに苦労をかけてしまったけれども、今年も写真を掲載できるのありがたい。

去年から今年までの一年間、われわれの仲間21名は、一人も欠けることなく、全員が80歳を超えた。病氣加療中の鈴木満明氏や外出に不安がある早川浩二氏のように、出席がむずかしい友人もいる。佐野清助氏(小金井市)は、腰痛や股関節の障害のため、同期会を引退したいと申し出られた。鈴木氏は、出席は叶わなければ、同期会の様子だけは知らせ



前列左から、山崎 勉、山本義次郎、市川嘉宏、八戸信昭、小野 傳、上西武仁
後列左から、永田 充、小泉 晋、神賀 弘、町 眞次、福来友康、横山靖明、加藤 洋

て欲しいと奥さんを通じて伝言があった。星宮伸光氏も、リハビリテーション中の時間をさいて、現状を知らせてくれた。

最遠方の神戸市から参加の市川嘉宏氏が乾杯のあいさつをしたあと、食事しながら歓談を続ける。

永田 充氏から、雑誌「レジデント」から、2015・11・2号【100歳まで安心…最強のマナー哲学入門「金持ち老後 貧乏老後」】のインタビューを受けたことが紹介され、一同が資料を見ながら説明を受ける。永田氏は、六十歳代後半に自宅に事務所を開いてから今年で11年経ち、これからは後輩の育成と地域の高齢者の問題を解決するのが目標とのこと、80歳を過ぎてますます元氣である。

昭和32年に卒業したわれわれの大部分は、仙台市を離れてから今年で58年になる。小泉 晋氏は、全日本大学女子駅伝（仙台市）の中継をテレビで見っていたけれども、画面の中に、58年前の仙台市内のおもかげがどこにもなく淋しい思いをしたという。

仙台市営地下鉄は、平成27年12月6日に東西線（荒井く八木山動物公園）が開通した。仙台駅から五つ目の駅が「青葉山」で、所要時間は9分という。駅から青葉山まで地下鉄で行けることなど、58年前には想像できなかったことである。

各自が日常気をつけている健康法として、社交ダンス、ウエイトを使う筋肉トレーニング、3,000歩以上のウォーキング、ゴルフクラブの素振り、家庭菜園が紹介された。外国に紅葉を見に行った人もいて、元気に動けるうちに、こうした集まりにも参加できる有難さを、毎

回感じる事ができる。

来年も11月に第18回目の同期会を開催することを決めて閉会した。

八戸 信昭
（精密工学科32年卒）

精密四十年卒 五十周年記念同期会

精密昭和四十年卒の皆さん、如何お過ごしでしょうか？

恩師・棚沢泰教授の言を拝借すれば、「ロンドンならぬ、東北大学・片平キャンパスのイースト・エンド」で、実験・実習・研究し、卒業した、片平キャンパス最後の精密工学科卒業生が我々でありました。

その直後、昭和四十（1965）年四月、工学部長に就任された棚沢先生の提唱による「（東北大学）工学部百年の計」の下、先遣隊として、機械系三学科が青葉山キャンパスへの移転に先鞭を着けました。町中（川内地区）から最短距離で青葉山に至る道路が未完の状態である時点で、移転が開始されるという驚きの戦法が取られていました。片平キャンパスで積み込んだ移転諸物品を運搬するトラックは、八木山香澄町・TBC東北放送本社の横を通り、その四月に完成したばかりの八木山橋を渡って、本学植物園に隣接する青葉山キャンパスに迂回する経路を取ったのです。

この年、小生などは大学院に入学した年（昭和四十年）でしたが、夏休みに、同じ研究室の同級生F君と一緒に、引越したトラックの荷台で、様々な備品装置

や消耗物品の入った段ボール箱が落下しないように見張る役目を仰せ付かったことなどが、懐かしい思い出として残っています。（以下、略）

その後、五十年を経た今年、平成27（2015）年3月8日、機械系同窓会の総会・特別講演会・交流会が、東北大学・青葉山東キャンパスで開催される予定でありました。それで、前日の3月7日に、精密40（1965）年卒の我々にとつて区切りとなる、卒後50周年記念の同期会を、仙台で開催してはどうか、という案が前年・平成26年暮れに、毎年のように出会っている同級生を中心に検討し、確定しました。

及川忠雄幹事長の下、在仙の同級生・菅野洋一・中村悌一郎両幹事のご尽力により、二〇一五年三月七日（土）午後五時〜八時 波奈エスパル仙台店にて同期会が進められました。

物故者への黙禱の後、自由歓談、東北大学校歌等合唱し、写真撮影後解散となりました。

今回の同期同窓会の出席者は、十名で略して記すと、つぎのとおりです。

及川忠雄、大西周作、菅野洋一、小林渡洋雄、櫻井克夫、佐々木久臣、佐藤裕久、中村悌一郎、中村徳彦、鳴海忠孝（写真にも、各人の氏名を記してあり、程度に差はありますが、皆さん、年相応の風貌になっているようです）

様々な話題に花が咲き、同時に、殆どすべての者が五十年前に戻ったように、元氣でわいわいと歓談し、あつという間にお開きの時間となった次第です。

またの再会を期しながら、解散後は、三々五々、仙台駅近辺に散って行きました。

おわりに、同期会開催後の関連話題を時系列的に二、三、付け加えておきます。

- ・平成27/3/8 機械系同窓会通常総会・役員改選の件で、平成二十七年年度の副会長に、同級生の精40・佐々木久臣氏が再選されました。
- ・平成27/6/29 同級生の精40・井関英雄氏が72歳で永眠されました。
- ・平成27/10/19 同級生の精40・今仁雄一氏ご夫妻を囲む仙台同期会を開催し、菅野洋一氏と佐藤裕久が出席しました。
- ・平成27/12/6 仙台市地下鉄・東西線が運行開始されました。(昭和62年、地下鉄南北線運行開始に加え)



て、現在では、仙台駅を交点とする地下鉄2路線が運行されています。)

(精密工学科40年卒 佐藤 裕久)

「45T同期会」参加記

私は大学紛争も生々しい昭和45年に工学部機械系に入学した。入学にあたり、下宿を斡旋してもらうため、夜行列車で仙台に到着した。教養部の事務所に行くところとして、西公園の交番で道を聞いた。「何！ お前も東北大生か！」といきなり警官に怒鳴られたのにはびっくりした。その交番は前夜、過激派の焼き討ちにあったそうで、よく見ると壁の一部が焼け落ちていた。勿論入学式も無く、ひっそりと授業だけが粛々と開始されたものの、ひと月もたたないうちにストライキに突入してしまつた。その後のごたごたを思うと、45年入学の私にとつて教養部時代はやはり暗いイメージが付きまとう。南こうせつらの歌が流行つた。

卒業後30年して私は自動車製造会社を辞し、石巻専修大学の教授に赴任して、宮城県に戻つて来た。やはり大学時代を過ごした地は親しみがあつた。たまたま東北大学で講演する機会があつた時と思うが、その懇親会の場で大学院電気・通信工学専攻の一ノ倉教授が私と同期入学で教養部のクラスも同じことが分かつた。それだけでなく『45T同期会』なるものが存在する事を知つたのである。同期会と言えば、卒業を同じくする者の集まりであるのが普通であるが、同じ年に入学したものの同志が集まる会に大いに

同感して則入会することにした。あの暗い時代を過ごした仲間に会いたいと思つたからである。当時工学部の学生は教養部で16クラスに編成され、同じクラスに機械・電機・土木建築…などの学生が混在していた。この15組のメンバーが中心になって構成されているのが『45T同期会(約50名)』で、幹事は阿部正一、鈴木基行、一ノ倉理の各氏である(私は16組)。

本会は毎年東京で開催され、5年に一度仙台で開催されている。平成26年11月の第12回大会は仙台で、土木の鈴木教授と一ノ倉教授が幹事を務められ、私も初めて出席させて頂いた。14:00時に青葉記念会館1Fロビー集合した後、震災後再建された工学部内建物を視察。その後5台の車に分乗して秋保のホテルへ向かつた。夕食ですつかり出来上がった後、2次会のカラオケタイムに入った。誰かが突然「ハリマオ」を歌われた。思わず私も大声をあげて歌つた。長い間、暗いイメージであつた教養部の思い出が一気に吹き飛んだ瞬間であつた。次の日は被災地の視察を兼ねて、閑上・荒浜・蒲生を訪れ、改めて犠牲者のご冥福を祈つた。私も津波に車ごと流され、沈みゆく車の窓を割り、泳いで逃げるといふ九死に一生の経験をした事が有り、3・11を思い出した。

同期の皆さんは私も含めて退職の時期を迎えている。しかしこのような元気な会が存在する事を知り、私も元氣をもらった。平成27年度は東京で阿部さん幹事の下で開催されたが、私はいにく用が有つて参加できなかった。今後は万難を排して参加を続けるつもりである。同

期入学の方で参加したい方がおられれば15組でなくても良いので一緒に集いませんか。最後に、入会したばかりの新人が、色々とさらけ出してしまったようで、45T同期会の皆さんにはこの場をお借りして陳謝致します。

「敢えて卒業年度を記さない」
山本 憲一



前列 (左から) 阿部正一 通信、岡崎哲治 (旧姓：森田) 機械、伊藤功 通信、山本憲一 機械、工藤大誠 応用物理、一ノ倉理 電気
中列 (左から) 郷右近裕 金属、伊藤博正 応用物理、大野茂 応用化学、伊藤俊樹 通信、青山正治 金属、荒谷真一 応用物理
後列 (左から) 相原誠 通信、山田洋 機械、相川正樹 電気、鈴木基行 土木
カメラマン 佐々木拓世 金属



平成 27 年度 (20 周年記念) 東北大学機械系同窓会通常総会・特別講演会のご案内

拝啓 春寒の候、ますますご清祥のこととお喜び申し上げます。

日頃、東北大学機械系同窓会の活動に対しご高配を賜り厚く御礼申し上げます。

さて、平成 27 年度 (20 周年記念) 通常総会ならびに特別講演会を下記要領にて開催いたします。今回は、東北大学名誉教授、科学技術振興機構顧問の阿部博之氏 (機械 34 年卒) より「伝統とは 創造の基盤か 停滞の温床か—東北大学における機械工学 100 年を顧みて—」と題した講演を賜ることになっております。

皆様お誘い合わせの上、ご参加下さいますようお願い申し上げます。

敬 具

記

日 時：平成 28 年 3 月 5 日 (土)

会 場：東北大学工学部中央棟 2 階

(青葉山キャンパス センタースクエア内)

〒 980-8579 宮城県仙台市青葉区荒巻字青葉 6-6

次 第：14:00-14:30 総会

14:40-15:40 特別講演会

講師：阿部 博之氏 (機械 34 年卒)

15:50-16:10 20 周年記念品の寄贈

16:20-17:50 交流会

会 費：5,000 円



特別講演会 (14:40-15:40)

「伝統とは 創造の基盤か 停滞の温床か
—東北大学における機械工学 100 年を顧みて—」

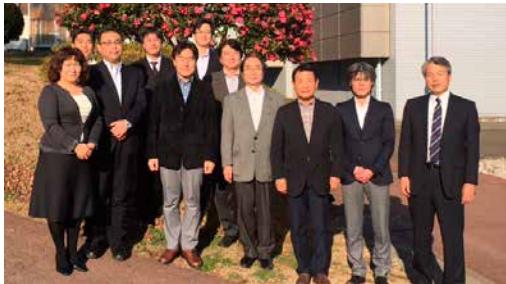
阿部 博之 氏 東北大学名誉教授、科学技術振興機構顧問

東北大学の機械系 (学科、専攻、研究科、研究所、施設など) は、これまで技術者、研究者などの多数の有為な人材を輩出してきました。

母校である機械系は、どのように変遷をたどったのでしょうか。とくにわが機械系の伝統とは何か、どのように創られ、どのような発展と停滞を経てきたか、そのような切り口から、未来への議論の一石になることを願って解説を試みます。

事務局便り

- ◎同窓会の部屋ができました。
機械系2号館3階 320室です。
- ◎同期会の原稿（ニュースレター）および同窓会誌の原稿を募集しています。
文字数・要綱につきましては事務局までお問合せください。
Tel/Fax 022-795-6926
E-mail : dousou@mech.tohoku.ac.jp
ホームページ : <http://www.dousou.mech.tohoku.ac.jp/>
- ◎住所変更の際は、新住所をお知らせ下さい。
- ◎懐かしいお写真を事務局までお寄せください。会誌、ニュースレター、ホームページに掲載させていただきます。
- ◎同期会の開催を支援します。
開催計画が決まりましたら機械系同窓会事務局までご相談下さい。
同期会の開催予告等をホームページやニュースレターに掲載致しますのでご連絡下さい。（ホームページは随時、ニュースレターは発行の2ヶ月前まで受付いたします。）



平成 27 年度幹事

編集後記

先輩方、50年間の山登りご苦労様でした。地下鉄や ああ地下鉄や地下鉄や！（T.N）

同窓会ニュースレター21号をお送りします。地下鉄東西線も開通し、アクセス性はだいぶ向上しました。また、ここ数年でキャンパスはだいぶ様変わりしました。機会がございましたら、是非青葉山キャンパスまでお越しください。最後になりますが、原稿執筆をご協力下さいました皆様に厚く御礼申し上げます。（Y.S）

地下鉄東西線が開通し、市内が身近に感じます。21号の表紙を青葉山駅にしています。これまでとは違う雰囲気の青葉山キャンパスをご覧ください。本号にご執筆いただきました皆様に心よりお礼申し上げます。（Y.T）

21号の表紙 地下鉄東西線青葉山駅周辺

■同窓会事務局

月～金 10:00～16:00

Tel/FAX 022-795-6926

E-mail dousou@mech.tohoku.ac.jp

学生支援に関するご報告

機械系同窓会では、毎年、機械系学生に対して様々な支援を実施しています。5月には恒例の工明会運動会にて機械系4専攻と流体研の各代表者に2万円ずつの支援（計10万円）、また機械系女子学生に対する支援（10万円）、3月の卒業証書授与式後に開催される謝恩・祝賀会に支援（10万円）しています。また、機械系学生と先輩との交流会として、機械系オープンフェスティバルを3月に開催しています。この場をお借りしまして、同窓会の活動にご支援頂いた会員の皆様に厚く御礼申し上げます。



工明会運動会



機械系オープンフェスティバル